

神戸女学院史料室だより

一九九一年の幕開けはとんでもない出来事に遭遇してしまつたが、我々はただひたすら、平和を来たらせ給えと祈り続けるしかない。もの心つくかつかぬかの幼児にとつて戦争は無条件にコワかつた。しかし時を経て、石油や紙類の値上がりをまず云々する「いい御身分」にならずにしまった我々は何と無責任に平穩をむさぼってきたことか。時の痛み、同胞の悲惨を他人事としないためにも、歴史家の使命の再認識を迫られているという気がする。

そして史料室自体、この一年は殊更に変わったこともなく、平穩に日常の業務に携わってきたが、興味深いのは、他の学

校から、神戸女学院の教育や卒業生を論文のテーマとして採り上げようとの意図で史料を求めて来られた方々が二、三にとどまらなかったことで、改めて、この学院の教育史上に占めるユニークな立場を実感した。原田園子助教の英語教育に関する研究はすでに「神戸女学院大学論集」に発表されているが、なお様々な面について、学内にも関心を持つ方が更にふえて下さると有難い。

一方学院全体を見渡すと、中高部長の交替、院長就任、理事長の長逝―と人事のみでも至って多事。城崎 進院長、今田 稔理事長代行の御寄稿に御礼申し上げる。初の女性中高部長原田恵子先生は小玉佐智子学長と同じく同窓生でもあり、学院史との関わりも浅くはない。城崎院長と共に史料室運営委員会に参加されるのを一同心から喜んでいる。(若山)